

キリスト教教育と私 (6)

塩野和夫

6

(1)

予定通り神岡鉦山で1週間を過ごしてから大阪に帰ると、真っ先に香里教会を訪ねた。1970(昭和45)年4月に入っていた。3月26日午後に大里喜三牧師の葬儀を行われた会堂はがらんとしていて、和子夫人だけが後片付けに忙しくしておられる様子だった。玄関から「塩野で〜す」と声をかけると、牧師館から出て来られた。大里牧師を失った衝撃を正直に伝え葬儀を欠席した非礼をお詫びした私は、彼女から予想もしなかったことを尋ねられた。

和子夫人：主人のことは覚悟していました。ところで塩野さん、塩野さんは単車に乗られませんか？教会の近所を訪問するために主人の乗っていた単車があるのよ。塩野さんに乗ってもらったら主人も喜ぶと思うんだけど、貰ってくれない？

私：あの単車だったら知っています。先生が乗っておられる様子を何回も見っていました。けれど、ぼくは免許証を持っていません。

和子夫人：それじゃ、塩野さんに単車は無理ね。そうそう、主人のために買って、ほとんど使っていない下駄があるの。あの下駄を貰ってくれない。

私：はい、下駄なら履きます。喜んでいただきます。

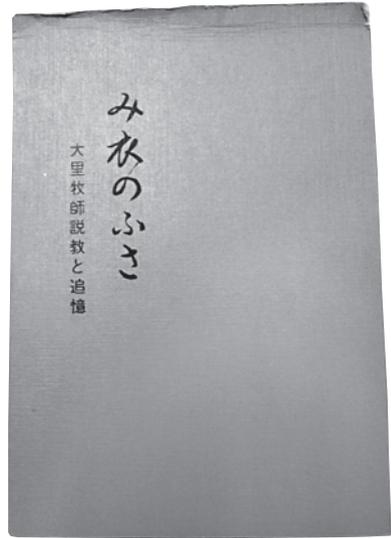
という返事が終わらないうちに牧師館に戻られた和子夫人は、しばらくして立派な下駄と紙袋を手にして帰って来られた。

和子夫人：これがその下駄です。主人の形見に貰って下さいね。

牧師を失った香里教会は日曜日の礼拝説教に、奥田牧師（聖和大学）・永井牧師（森小路教会）・石田牧師（玉出教会）など、近隣教会から応援を受けた。教会学校や青年会の活動は引き続き活発で、目立った変化はなかった。ただ集会のない平日は、大里和子夫人と3人のお譲さんが住んでおられる牧師館を含めて、空気の沈み込んだようなさみしい感じがした。それで青年会の会員と教会学校高等科所属の高校生はなるべく夕方に教会を訪ねる事にした。教会に行くといたい誰かがいて、しばらく話

しこんだ。日程を調整して男ばかり数名が会堂に泊った夜もあった。その日の夕食は和子夫人の用意くださったカレーライスをご馳走になり、夜が更けるのも忘れて話し合った。大学生の先輩からは大学紛争の様子を、税務を学ぶ専門学校に通っていた先輩からは税金徴収の話などを聞いた。新鮮だった。

5月に入って和子夫人から「塩野さん！」と呼び止められた。彼女によると、「大里牧師の蔵書はほとんど近隣の牧師に引き取られた」。しかし、僅かに残っている本があるので、「それを貰ってくれないか!？」という申し出であった。それで学校の帰りに教会に寄り、初めて大里先生の書齋へ案内していただいた。部屋はがらんとしていて、いくつもの大きな本棚があった。しかし、いずれもほとんど空っぽになっていた。それでもよく見ると隅っこにわずかに残っていた本がある。それらを集めて用意していた風呂敷に包むと、30冊ほどあった。そのすべてをいただいて自宅に持ち帰り調べてみた。すると、C.H.ドットの小さな著書で大里牧師を指導された船本坂男先生の署名が入った本や、法然上人の『選択本願念仏集』などもあった。それとある本に千円札が3枚挟んであったので、三千円を和子夫人に届けた。「まあ、主人はこんな所にへそくりをしていたんですね」と笑いながら受け取られた。



『み衣のふさ 大里牧師説教と追憶』

8月から奈良高畑教会の杉田常夫牧師と杉田典子牧師ご夫妻が後任として赴任されることになったので、その前に大里和子夫人とご家族は教会近くのアパートに転居された。

*

もう一つ急ぐことがあった。左足首の検査である。神岡鉱山に出かけた主な理由は、8月に開催される国体予選の柔道大会に備えて筋力トレーニングを開始することであった。しかし、あの雪山で見た大里牧師の幻は「塩野君、自分の弱さに正直に生きなさい!」というアドバイスを含んでいた。だから、それまでは意図的に無視してきた左足首の痛みに、幻を見た時以来素直に向き合い観察を続けていた。左足首はやはり痛い。左足で踏ん張ろうとすると、鋭い痛みが走る。サッカーの怪我から3か月以上経つのに、状態が良くなっているとは考えられない。通院していた整骨院の重複捻挫という診断と治療では何か足りないように思われた。

そこで、枚方市民病院で左足首の検査と診察を受ける事にした。何枚もレントゲン写真を撮られてから、結果を聞き愕然とした。「左足首の筋が伸びきっている。この状態では歩くこともよくない。まして柔道をするなどというのはとんでもないことで、当面はなるべく安静にしておくように!」という医師の見立てだった。診察を終えて、自宅までゆっくりと歩いて帰った。歩きながら聞いたばかりの言葉を心の中で繰り返していた。ドクターストップの宣告は直ちには受け入れがたかった。こつこつと練習を積み重ね、ついに大阪府大会優勝という頂点の目前にまで来ていた。ところが、医師の言葉は目標を目指そうとするあらゆる可能性を否定していた。しかし、「左足首の筋が伸びきっている!」という悲しい現実を受け入れざるをえなかった。高校3年生になったばかりの春に直面したのは、まさに青春の挫折だった¹⁾。

柔道部春休みの練習が始まると、3年生の部員には左足首に対する医師の診断内容を正直に話した。同時に「怪我に対するドクターストップで練習はできなくなったが、柔道部は止めない。止めないで、後進の指導に当りたい」と希望を伝えた。みんな黙って聞いてくれていた。しかし、団体戦の主要メンバーが抜けるという突然の話に彼らの受けた衝撃はひしひしと伝わってきた。申し訳なかった。

1) 参照、「はく青春」(塩野和夫『一人の人間に』48-50頁)

新学期に入ると思いがけない新入部員が柔道部に入ってきた。ジェフ²⁾である。彼は A. F. S. (American Field Service) という団体から派遣されて1年間日本へ来た留学生で、同志社香里高校の2年生に在籍し勉強することになっていた。何事にも積極的に機知が効き人間関係を大切にしているジェフは、柔道部の誰とでもすぐに親しくなった。柔道部の部員もジェフを囲んで楽しんでた。たとえば、何食わぬ顔で梅干を食べせてジェフにも勧め梅干のすっぱい味に驚ろかせたり、大阪弁で仁義の切り方を教えて楽しむといった風である。後進の指導に当たりながらそんな様子を遠くからながめていた私は、思いがけずジェフに柔道の手ほどきをすることになった。片言の英語と日本語、それに動作を交えて毎日教えたので、彼とはすっかり親しくなった。それで確か6月に入ると日本文化に関心を持つジェフを宇治へ案内して、自転車借り黄檗宗の万福寺³⁾を訪ねた。翌週には京都駅の北側にある浄土真宗の西本願寺⁴⁾を訪ねた。その日のことである。西本願寺本堂の広い畳の間に腰を降ろしながら、ジェフが尋ねてきたのである。

ジェフ：シオノさん、先週行った宇治の万福寺と今日来ている西本願寺では、同じ仏教でもずいぶん違う気がします。

塩 野：宇治の万福寺は黄檗宗という禅宗系統のお寺で、西本願寺は浄土真宗なんだけど、……？

ジェフ：それで、同じ仏教でもこの雰囲気の違いはどこから来ているのですか？

塩 野：それは、……？

万福寺のきびしさと西本願寺の寛容さという雰囲気の違いはどこから来ているのか。高校生の私にはその理由を理解することも、したがって説明することもできなかった。

2) ジェフリー クラーク (Jeffrey Clark) ジェフと呼んでいた。彼はスタンフォード大学 (日本語科) を卒業すると再来日し、NHK のラジオ英会話講師などで英語を教えていた。2004 年に帰米し、著作に務めている。次の著書がある。

Jeffrey Clark, *Back in the U. S. A.*, NHK Publishing, 2006

3) 宇治にある万福寺は黄檗宗の大本山である。総門から法堂に至る境内を歩いたが、引き締まった雰囲気に満ちていた。

4) 京都駅から北に位置する西本願寺は浄土真宗本願寺派の大本山である。二人がくつろいだ広い畳の間には、「ゆっくり休んでいきなさい」と言われているような雰囲気があった。



那須 淳男 先生

ジェフと親しくなってもう一度英語に関心を持つようになった一方で、日本文化を外国人に説明できるまで理解しておかなければならないと感じた。

*

高校3年生のクラスはE組になり、担任はあの那須先生⁵⁾だった。中学3年生の時も英語を教えていただいた先生には英語の成績で教員室に呼び出しを受け、注意されたことがある。しかも、最初のホームルームでE組の委員長に選出されてしまった。副委員長はバスケットボール部の楠神である。同志社香里高校の3年生というのは、しまりがなくばらばらだった。クラスをまとめる上で有効だった修学旅行は終わって

5) 那須淳男先生は同志社高校から同志社大学に進学し、英語を学ばれた。同志社高校では同志社大学経済学部における恩師島一郎先生と同級生で同じクラスになられたこともあった。

いる。多くの生徒の関心はすでに卒業後の進路に向いていた。同志社大学以外の大学で医学部を目指す生徒は、受験に備えてがりがりと勉強していた。同志社の工学部を希望する者は数学だけ真面目に授業を受けていた。

そんな中で進路については何も考えていなかった私に、思いがけない指導をして下さる先生が現れた。高校3年生に経済を教えて下さった鍋木先生⁶⁾である。1学期も後半に入った頃、なぜか先生は毎週のように授業が終わると声をかけて下さった。

塩野君、これはケインズという経済学者について書かれた本です。来週までにこれを読んで来て下さい。

塩野君、これは近代経済学の理論を分かりやすく説明した本です。来週までにこれを読んで来て下さい。

塩野君、近代経済学では数学を使います。これは数学を使って経済を分かりやすく分析した本です。来週までにこれを読んで来て下さい。

本を返すたびに鍋木先生は感想を求められ、その上で大学について繰り返しアドバイスして下さい。

塩野君、大学という所は暇が何よりも大切です。考えるという作業は暇がないと出来ないからです。ところが、実験などで暇のない学部もあります。間違ってもあいう学部に行くものではありません。そういう学部と比べると、経済学部はたっぷり暇があっていいものです。塩野君にはぜひ経済学部に進んでもらいたいものです。

3年E組をクラスとしてそれなりにまとめ、なるべく多くの協力者を得て進めていく有効な手段として思いついたのが、学級新聞の発行である。月刊のクラス新聞は体育祭や文化祭などの行事を盛り上げ、日常的にも情報交換の場として役立ちそうである。楠神の賛成を得ると教員室に那須先生を訪ね、「3年E組クラス新聞」の発行について意見を求めた。先生も「それはいいんじゃないか！」と賛同して下さいだったので、

6) 学究肌の鍋木路易先生は分かりやすく経済学を教えられただけでなく、近代経済学に関する本（小冊子）も書いておられた。

ホームルームでみんなの意見を求めた。「委員長が提案するなら、反対はしない」という消極的な賛成が大方の雰囲気であった。それで、早速5月号の発行に取り掛かった。5月号は最初のクラス新聞になるので、那須先生に執筆をお願いしたら「片肺飛行」という記事を書いて下さった。その頃、飛行中に一方のエンジンが不調になったけれども、無事空港に着陸したジェット機が話題になっていた。先生はこの出来事を取り上げて、「高校生活では不本意なこともあつただろうが、あの飛行機のように最後の目標は達成するように！」と書いて下さった。

「3年E組 クラス新聞5月号」ができるとすぐに、それを1部持って校長室を訪ねた。クラス新聞の発行を喜んで下さった生島校長には、抜け目なく「クラス新聞6月号」への寄稿をお願いした。その日に生島先生からうかがった話である。

塩野君、アマースト大学⁷⁾は学生の定員50名を増員するかどうかをめぐって2年間全学的に検討したことがあった。その時の結論がどういうものだったと思うかね。「定員50名の増員をしたとして、彼等に対する教育内容を低下させないと保証できるか？」と考えると、「保証できない！」という結論だった。そこで、「教育内容を低下させる恐れがある増員はすべきでない」という判断を下したんだ。塩野君、教育は人数ではないんだ。教育内容を何よりも大切にしないといけない。アマースト大学は教育内容を重視することにより、現在でもアメリカで高い評価を受けているんだよ。

(2)

夏休みに入って間もなく、柔道の合宿で岡山へ行った。宿舎は2年前と同じ岡山市駅近くにある総合運動公園内にある洋風で屋根のそそり立った合宿所、3度の食事も宿舎の近くにある喫茶店風のレストランの2階でいただいた。この時は2年上の江崎先輩が参加下さった。同志社大学で柔道部に所属された先輩は一層力が強く、投げ技も鋭くなっておられた。午前中の練習は関西高校に行って同校の柔道部員と汗を流し、午後は市内にあるいくつかの高校に出かけた。関西高校には2年前と一緒に練習をし

7) アマースト大学 (Amherst College) は1821年にマサチューセッツ州に設立された大学で、少人数クラスによる教養教育を行っている。生島先生はアマースト大学の卒業生でもあった。

た柔道部員が何人か残っていた。柔道場では真剣な顔をしていた彼等も、練習を終えると人なつこい表情を見せていた。実は合宿に入る前に主将の高鍋から相談を受けていた。「怪我のことは分かるが、今度の国体予選は3年生にとって最後の試合になる。それで、団体戦の先鋒に出てくれないか。塩野のためにもそれがいいと思う」。私の柔道生活を考えての申し出であり、しばらく考えて試合への出場を引き受けた。しかし、合宿では軽くトレーニングをただけで本格的な練習はできなかった。ふんばるとやはり左足首がうずき、とても練習できる状態ではなかったからである。それがかつて金沢で先輩からそうしてもらったように、昼は喫茶店に入って後輩にかき氷をおごってやり、夜には焼き肉屋にこっそり出かけてご馳走してやった。かき氷にしても焼き肉にしても、後輩は練習の辛さを忘れておいしそうに食べていた。

*

柔道の合宿から帰ると、数日後に教会学校の修養会に和歌山県の貴志川町（現在は紀ノ川市に合併されている）へ出かけた。貴志川町は和歌山市から東へ20km程行った紀ノ川の支流である貴志川沿いに開けていた。貴志川の近くにある昔ながらの道に沿って集落が広がり、その中にあるかなり大きな旅館が宿舎となった。宿舎から歩いてしばらく行くと集落のはずれに神社があって、その広い敷地で朝夕の集会を開いた。貴志川をせき止めた場所は大きなプールのようになっていて、そこで泳いで遊んだ。この時は千田・中岡を初め山本・張本・金田・福井など10名近い高校生が参加していて、小学生中心の修養会とは少し様子が違ってきていた。夜になると大原先生の誘いで数名の高校生とこっそり宿舎を抜け出して、先生の実家を訪ねた。貴志川町は大原先生の故郷だった。数年後に香里教会青年会はクリスマスが終わると、一日かけて餅つきをするようになる。その時にもち米を提供下さったのが、大原先生のご実家である。

教会学校の修養会から帰ると、内座と阪口に誘われていた四国を縦断する自転車旅行に出かけた。計画を立てたのは内座で、彼は綿密にコースと宿泊所を考えていた。宿舎はすべてユースホステルだったので、この時大阪市中之島にあった関連施設で会員の登録をした。初日の待ち合わせ場所は神戸市東灘区にある港のフェリー乗場で、坂出まで行くのに乗船料の他に500円を自転車の運搬料金として求められた。坂出では早めの昼食を取ることにして、うどん屋に入って3人で素うどんを食べた。

1日目は時間的に余裕があったので、海岸沿いを東へ走って屋島に行き見学した。



坂出の港にて（右より，塩野・内座・阪口）

それから同じ道を西へ向かい高松のユースホステルで宿泊した。2日目はまず高松から琴平を目指して緩やかな登り道を行き，そこからは満濃池の横を通って南向きに走った。お腹が空いたので1日に3回はうどん屋に入った。どこでも3人そろって素うどんを食べたが，店によって具が違っていた。徳島県に入ってから吉野川に沿って南の方向に坂道を上り，大歩危小歩危沿いを走った。予定ではこの辺りで休憩するはずであった。しかし，川の水量が多く時間も遅れていたため，休まないで走り続けた。2日目の宿舎は吉野川の支流沿いを上った高知県大豊村（現在の太豊町）にあるユースホステルで，このホステルは禅宗の寺院が経営していた。それで希望者には早朝に本堂で座禅を勧められた。禅を組むのは10分ほどであったが，とても清々しかった。3日目の朝は私が先頭で出発し，阪口・内座と続いた。ところが，吉野川との合流地点でいくら待っていても二人は来ない。1時間ほど経ってからだろうか，軽トラックに乗った阪口と自転車の内座がようやく現れた。しかも，軽トラックに積まれた阪口の自転車はゆがみ，彼が手に持っていた眼鏡は壊れ，本人も足に何か所か擦り傷をしている。「下り道の途中，軽トラックとぶつかって川の方へ飛ばされたが，この程度で済んでよかった」という話だった。仕方がないので阪口はここで離脱し，そこからは内座と2人で旅行を続けた。3日目はそれでも時間的にゆとりがあったので，龍河洞を経由して高知市のユースホステルに向かった。4日目は距離こそ80キロメー

トル足らずと短かったが、ずっと上り道だった。夕方に着いた面河溪（現在の愛媛県久万高原町）にあるユースホテルで宿泊した。5日目は宿舎から松山市の東側を回る道を行き、その後は海岸沿いをひたすらに川之江まで合計160キロメートルを走った。目的地の川之江港には夕方に着いたが、2人ともお腹はペコペコである。ところが、ここで思わぬハプニングが待っていた。乗船券は事前に購入していたが、自転車1台につき1,500円を求められたのである。行きの運搬料金は500円だったため、内座の財布には500円しか入っていない。仕方がないので内座の不足分1,000円を出すと、私の財布にも5円玉1枚しか残っていない。その夜は周辺で夕食を取る人たちを見ながら、二人は何も食えることができなかった。翌日は空腹を抱えて私は神戸から枚方まで、内座は京都まで走り、ようやく自宅へたどり着いたのである。

*

四国から帰ると8月も中旬になっており、国体予選に備えた練習が待っていた。1週間ほどの練習にはもちろん全て参加し、心身ともに集中して打ち込んだ。ただし、投げ技に関しては得意技である左背負い投げを避けて、左足首に負担のかからない左の大外刈りや内また、それに巴投げと足技の練習をした。このように最後の練習に打ち込んだのであるが、夏の合宿に入る前から頭を離れない問いがあった。

ドクターストップをかけられた体で、あえて試合に出場する意味はどこにあるのか!?
これまでのように勝ちを追求できない体で、それでも試合に出る意味は何なのか!?

振り返ってみると中学3年生の春、初めて黒帯を締めて団体戦に出た試合があった。あの時は相手の投げ技に思わず手をつき、手首を骨折した。その後は右手だけで5分間の試合を耐えた。あの時も怪我の試合であった。しかし、試合中に偶発的に起こったあの時と今回の怪我は事情が違う。今回は初めからドクターストップをかけられて、半年以上柔道の練習も得意技の練習もできない状態での出場である。だから、勝利を目標にした試合ではない。それでも出場する以上、何か違った目的を探さなければならない。

これまでも練習の初めと終わりに行う黙想の時には、新島先生に呼び掛けてきた。最後の1週間の練習ではこれまでになく切実に呼び掛けたし、先生の声も親しく聞こえてくるように思えた。

矢尽きて止むる勿れ、刀折れて止むる勿れ！

劣才 たとい済民の策に乏しくとも
尚壮図を抱いて この春を迎う

死の直前に「尚壮図を抱いて」新春を迎えられた先生は、ドクターストップをかけられた体で試合に向かう者に何を語りかけて下さるのであろうか。少なくともあの時、新島先生の国を思う切実な精神性がこれまで以上に身近に感じられた。

しかし、問いに対する答えがよく分からないままに試合の日を迎えた。会場は昨年と同じ大阪市立中央体育館である。1回戦の相手は足技で崩して抑え込み、一本を取った。2回戦の相手はかけてきた技を崩して抑え込み、一本を取った。3回戦の相手が浪商であった。序盤は互角であったが、中盤に入ると練習不足のため相手の動きについていけなくなった。そこを狙われて足技で技ありを2本取られ、敗れた。団体戦も敗れたが、この年の優勝校は浪商であった。最後の試合を終えて高校に入ってから公式戦の成績は23勝1敗1分けになっていた。1敗は高校生最後の試合における負けである。しかし、負けて「悔しい！」という思いはなかった。この結果は初めから分かっていたし、むしろ負けるために出場した試合であった。すべてを終わってから、あの問いに対する答えをついに得たような気がした。

夏休みの終わりに引退する3年生全員が柔道場に集まった時、3年生一人ひとりから後輩に言葉を送った。私の贈る言葉はこうであった。

1年前のこの日、ほくは引退される先輩に向かって1年後の大阪府大会で個人戦も団体戦も優勝することを誓った。あの時は本当にそのように思っていたので、その言葉も嘘ではなかった。けれども、怪我をして練習はできなくなり、優勝もできなかった。しかし、ドクターストップで練習できなかった半年の間に優勝するよりも大切なことを学んできたように思う。それは柔道、つまり柔（やわら）の道（生き方）についてである。思いがけない事情で願っていたようにならないような場合にも、柔の心を持って礼儀正しく人間としてふさわしく生きる。そういう人間性を鍛錬するのが柔道である。だから、みんなも柔道の練習を通して、しっかり自分を磨いてほしい。

(3)

2学期に入ると新島襄と同志社の教育に対する関心がますます強くなった。とりあえず、中学1年生の時に西邨辰三郎先生に習った岡本清一『新島襄』や柴田さんから頂いた『同志社九十年小史』、それに大塚節治「同志社創立者 新島襄先生」と新島襄「同志社大学設立の旨意」⁸⁾を取り出して読んでみた。いずれの本からも心に感じる所があり、改めて新島襄の教育にかける情熱と現在の同志社における教育について思いめぐらす日々が続いた。

そうこうするうちに、10月上旬に開かれる体育祭も終わったある日のホームルームで、私は突然に提案した。

1か月後に文化祭が迫っており、これは個人的な希望だけれども、今度の文化祭において3年E組で「同志社今昔」というテーマで展示をしたいと思う。3年間あるいは6年間、同志社香里で学んで来て、改めて同志社って何なのかを考える企画である。部活や大学進学などいろいろあるので、全員の参加は望めない。それで協力できる者だけで準備し、しかし3年E組の展示としたい。みんなの意見を聞きたい。

いきなり私の提案を聞かされた教室は静かになった。委員長の提案に賛成するわけではないが、正面切って反対意見も述べにくい。そういう雰囲気の中から、いくつかの慎重な意見が続いた。

3年生のこの時期になって、わざわざ文化祭の展示などしなくてもいいのではないか。

大学進学に備える大切なこの時期に、みんなも展示発表には参加しにくいのではないか。

8) 大塚節治「同志社創立者 新島襄先生」は、高校1年生の宗教の時間に大橋先生がテキストとして用いられた小冊子だったと思う。新島襄「同志社大学設立の旨意」は同志社香里中学・高校で編集されたもので、これは同志社香里中学校卒業の折にいただいたものと記憶する。



3年E組の文化祭 説明しているのが私

数人の意見を聞きクラスの雰囲気も分かったので、私は新たな提案をした。

みんなにとって大学進学に備えた勉強が大切なことは分かる。それで展示の準備をする日には、初めに数学か国語の補習をしてみんなの勉強の不利益にならないようにしたい。それから展示内容についてはほしいの構想があるので、文化祭の準備はそんなに大変なことにはならないと思う。何人か手伝ってくれる人がいれば準備はできると思う。

新たな提案に対して「それならば手伝ってもよい」という者が出てきたので、とりあえず週に2日を文化祭の準備にあてる日とし、3年E組の展示を出すことになった。

展示物を準備する日の放課後クラスを後にする者も多い中で、木村・小永・源島・中川・藤本・堀端・柳田など10名くらいは残ってくれた。それでまず、数学か国語の補習を全員で1時間程度行った。それから展示物の準備である。展示内容は大きく2部に分かれる。1部は創立当初の同志社で、こちらは時系列で出来事順に用意する。それも模造紙の半分には絵を描いて、分かりやすいものにした。2部は現在の同志社における教育の特色で、要するに同志社の校風である。こちらはテーマごとに並列し

て書いていく。これらを30枚程の模造紙に書いていった。準備を始めると、みんなは次第にのめり込んでいった。帰りの時間も遅くなっていく。担任的那須先生も心配して様子を見に来て下さった。最後の週はさらに遅くなったので、とうとう那須先生は差し入れを持ってきて下さった。何とか完成して、文化祭当日を迎えた。

文化祭を迎えた朝、「同志社今昔」の展示室となった3年E組の教室には10名ほどのクラスメイトがいた。同志社香里の中高生に交じって、生島先生・英語の林先生・数学の川人先生⁹⁾など先生方も次々と来て下さった。クラスメイトは1対1で対応して、来室者に説明した。香里中高の保護者や他の高校からもかなりの方が来て下さった。午後になると、香里教会高校生会に出席していた大阪女学院高校2年生の清家さんが、同級生10名程を連れて応援に駆け付けてくれた。彼女たちは文化祭の終わる頃まで教室に残っていて、何かと手伝ってくれた。そのため、3年E組はこの日だけはまるで共学になったような雰囲気だった。文化祭は成功裏に終わった。

*

文化祭が終わると校長室を訪ねた。生島先生から呼び出しを受けたからである。先生は文化祭の展示に対するねぎらいの言葉をかけて下さると、すぐに本論に入られた。

生島校長：塩野君も新島先生の左のこめかみに深い傷の跡があることは知っていると思う。

塩野：はい、知っています。

生島校長：塩野君はあの傷がどういう性格のものか、考えたことはあるかね。

塩野：……、いいえありません。

生島校長：いいかね。あれは刀傷だ。喧嘩をして左こめかみに受けた刀傷だ。おそらく新島君は若い日に女のことで争って喧嘩し、こめかみに刀傷を受けたんだ。

塩野：そんなこと、考えたこともありません。

生島校長：そこで、塩野君に言うておきたいことがある。同志社ではすでに新島先生が伝説化されていると私は思う。それは必ずしも悪いことではない。

9) コーヒーが好物の林彰先生は同志社大学でも英語を教えておられた。3年F組の担任であった川人洋一先生は同志社香里の卒業生で気さくに生徒に声をかけて下さった。

しかし、伝説化される中で人間新島を忘れてしまって神格化を始めると何か狂ってくる。そのような時にあの刀傷は新島襄が聖人君子ではなく、当り前の男だったと語っている。当り前の人間である新島襄が情熱を注いで同志社を創立したんだ。いいかね、塩野君、ここが大切なんだ。

*

8月に香里教会に転居して来られた杉田常夫牧師は故大里牧師と同じ大阪城北教会で船本坂男牧師の門下生だった。しかし、ダイナミックに活動し立場の違いも乗り越えて交流を試みられた大里牧師に対して、杉田牧師はこつこつと教会形成に打ち込むタイプであった。文化祭が終わると、私は洗礼を受けるために入門講座の受講を申し出た。洗礼については神岡鉱山から帰った頃に、それとなく母親に打診していた。「塩野の家は浄土真宗やから、キリスト教の洗礼はあかんわな！」というのが母親の回答だった。それを承知で、再度11月中旬に私は父と母に向かっていった。「今度のクリスマスに洗礼を受けようと考えている！」2人は何も言わなかった。言えなかったのであろう。両親の困惑を勝手に黙認と解釈して11月中旬から3回ほどの入門講座を受講し、12月20日(日)のクリスマス礼拝で洗礼を受けた。同じ日に中西先生のお母さま、京都大学の学生で2歳年上の清水さんと久下さん(いずれも男性)も洗礼を受けた。多くの方々から祝福を受けたが、あの日に忘れられないのは福田のおばあちゃんである。香里教会のために開拓伝道の時から大里牧師と労苦を共に担って来られた福田さんが、あの日「塩野さん、おめでとう！」と言って眼に涙をいっぱいためて見つめて下さった。おばあちゃんの涙には心を打たれるものがあった。

一連のクリスマス行事を終えた12月25日(金)の夜に思いもかけない出来事に出くわし、洗礼を受けた意味を考えさせられた。あの日の夜10時頃、一人で香里園駅東口の階段の真下にいた。その時階段の上で倒れ、階段をゴロゴロと転がり落ちて来た女性がいた。しかも彼女は私の目の前に転がって来て、身動きできないでいる。一瞬その場を立ち去るわけにもいかず困惑していると、階段を駆け下りて来た若い男性から、「近くに病院を知りませんか？」と尋ねられた。「すぐそこに、関西医大付属病院があります」と答えたが、それは前日の24日にキャロリングで回ったばかりの病院であった。ただちに二人で女性の両肩を抱えて病院までの坂道を登って行き尋ねると、「今日の夜間診療は枚方市民病院で行っていますので、そちらの方に行ってください」

という返事である。市民病院まで道案内することになった私は、後部座席でぐったりしている女性の隣に座り、後ろから道案内をした。男性に指示を出しながら、青白く表情のない女性は「大丈夫だろうろうか？」と心配で、時折覗きこんでいた。市民病院までは10分程だったが、その間繰り返し魂に響いてくる一つの問いがあった。

お前が洗礼を受けたのは、倒れていたこの女性にとって何なのか。世の中で困っている人たちに何の意味があるのか。

という問いである。枚方市民病院の受付を終えると、二人と別れ自宅まで歩いて帰った。その夜に倒れていた女性を思い出しながら書いたのが、「ほくのクリスマス」¹⁰⁾という拙い1編の詩である。あの詩で求めていたのは、クリスマスに洗礼を受けた意味である。洗礼を受けたのは「私一人が救われ、幸福になる」、そんなことのためではない。そうではなくあの詩が歌っているように、入院している子供たちとK女学院の女の子たちの純粋な心そして私の歩み、それらはすべてイエスにおいてつながっている。つながりながら心と体と魂が人間としてふさわしく快復されていく、そこにある喜びのためこそ、洗礼を受けイエスにある私はこれから生かされていくんだという決意である。

3学期が始まると、体育館の職員室に野原先生¹¹⁾を訪ねた。洗礼を受けた報告をすると、先生からは意外な答えが返ってきた。

塩野が教会に行っていることは以前から知っていた。それで、ずっと塩野を見守っていた。そうか、クリスマスに洗礼を受けたのか。おめでとう。

(4)

年が明けて1月3日から5日にかけて、長野県の北東部にある菅平ヘスキーに行った。呼びかけて下さったのは大阪樟蔭高等学校の英語教師仁木先生で、参加者はAFSから大阪周辺に派遣されていたバーバラ（樟蔭高校）・セレスト（多分、神戸女学院

10) 「ほくのクリスマス」(塩野和夫『一人の人間に』14-16頁)

11) 野原康一先生は3年D組の担任で、柔道部の顧問であった。同志社大学神学部の深田未来生先生と共にキリスト教活動を担っておられたことは、後に知った。



菅平スキー場にて
(左より) ジェフ・セレスト・女性教師・バーバラ・姉・弟
仁木先生・塩野・女性教師

高校)・ジェフ(同志社香里高校), それに仁木先生と女性の教師2人, ジェフがホームステイしていたお宅の高校生の姉と弟, そして私の総勢9名であった。新大阪駅に集合して新幹線で名古屋まで行き, そこからは中央線に乗り換えて長野駅で降りると, 菅平はすぐそこだった。何回か同志社香里の柔道場へ来ていたバーバラを除くと, 初めて会う人たちばかりだった。しかし, 新大阪駅の集合場所からたちまちに打ち解けて, あっという間に過ぎ去った楽しい三日間だった。

仁木先生はほぼ同じメンバーで, 1月15日に柳生街道のハイキングに誘って下さった。その日は快晴でポカポカと温かく, 楽しいハイキングが予想された。事実楽しいハイキングであったが, 途中からバーバラとジェフそれに私は1つの集団を作ることになった。歩きながらいかにも不思議そうな表情をしたバーバラが, 日本語と英語を交え次から次へと私に鋭く質問してきたからである。ジェフは二人の傍らにいて会話を耳を傾けていた。



柳生街道にて
(左より) バーバラ・ジェフ



山の辺の道にて
梅の花に見いるセレスト

塩野、あなたはなぜそんなにキリスト教に興味を持つのか?!

塩野、あなたはなぜキリスト教を信じることができるのか?!

塩野、あなたは何をキリスト教に期待しているのか?!

バーバラに対して私は「死と生に対して求めてきた問い」、「仏教とキリスト教に答えを求めたこと」、「ついに雪山で牧師の死を通して出会ったキリスト教の真実」、「クリスマスに洗礼を受けて考えていること」などを、なるべく丁寧に話した。怪訝そうに聞きながら、バーバラは納得がいかないようだった。1時間余り話し合っても、それだけではとても理解しあえる内容ではなかった。それにしても、言葉の壁など言いたいことをうまく伝えられないもどかしさが残るハイキングとなった。

2月に入ると山辺の道を歩くハイキングに誘われた。この時にはバーバラは参加できなくて、セレストがいた。同じアメリカ人の高校生なのに二人の雰囲気はずいぶん違っていった。そのこともあってかハイキングは前回とはすっかり違い、穏やかなものになった。天気は柳生街道を行った時は快晴だったのに、この日は雪交じりの悪天候だった。山の辺の道沿いに一本の梅の木があって、雪を積もらせながら花を咲かせていた。その花を立ち止まってしばらく見続けていたセレストに、「この人は静かだけれど、思いの深い人なんだ」と感じた。関心を持つ対象、物の感じ方、表現の仕方、様々な面でバーバラとセレストは対照的だった。

2月に入るとほぼ連日、学校の帰りに小西宅へ小西正哲の勉強を見るために訪ねた。竹内兄弟の家庭教師は、約束通り1969（昭和44）年3月末で終えていた。ところが、4月から香里園で珠算教室を開いておられる小西家の長男で当時小学校6年生の正哲君と4年生の裕亮君の家庭教師をすることになった。依頼された内容は、正哲については「同志社香里中学校を受験するために」、裕亮は「少しでも机の前に座る癖をつけるため」勉強を教えてほしいという要望であった。小西兄弟の場合、竹内家で初めに申し出たような条件は何も求めなかった。ただご両親の希望を聞き、それならば「応えられる」と考えたので引き受けた。中学校の受験指導はすでに竹内兄弟で経験していたので、要領は分かっているつもりだった。しかし、計画したように勉強は進まない。正哲は小学生ながら自分の立場を持って、考えもしっかりしていた。それは驚くばかりであったが、彼の性格は勉強面で悪く働く柔軟性に欠ける事となった。応用が利かないのである。それで勉強も予定したようには進まない。受験を控えた2月に入ると、連日のように出かけなければならなくなったわけである。裕亮はよほど機転のきく男である。頭が良すぎるのである。頭は良いのに、なぜ「机の前に座る癖をつける」必要があるのか。回転が速いため、つつい他ものことに関心が向いてしまう。次々と出てくる新鮮な話題を聞きながら、教師はとにもかくにも所定の時間を机の前に座らせておくのに精一杯であった。

連日の努力の甲斐があつてか、小西正哲は同志社香里中学校に見事合格した。ご両親からは「正哲は中学校に入ってからも勉強のため」、「裕亮は引き続き机の前に座っている指導」を続けてほしいと依頼を受け、引き受けた。正哲は同志社香里中学校に入学すると間もなく、天文部に入った。「なぜ、天文部なのか」と尋ねた問いに対する答えが忘れられない。正哲の答えはこうであった。

星は嘘をつかない。

*

2月も下旬になり卒業式まで1週間ほどに迫ったある日の午後、校長室に生島先生を訪ねた。3年間の指導に対するお礼を言うためである。ところが、生島先生はとても多忙で疲れておられるようであり、「今日は時間をとれない。塩野君には話があるので、改めて声をかける」という事であった。呼び出しを受け、校長室を訪ねたの

は卒業式の数日前である。ソファーに座るようにと指示し、「塩野君に言っておきたいことがある」と前置きされてから、生島先生からうかがった言葉は生涯忘れることができない。あの時、生島先生はしっかりと眼を見開いて私を見つめ、一言ひと言かみしめる様にして語って下さった。

塩野君、塩野君には人間を見る眼をぜひ養ってもらいたい。いいかい、語られた一言がどんなにすばらしい言葉であっても、たったひと言でその人間を判断してはいけない。人間という者は、その人の全体を見てから評価するものだ。塩野君にはその人の全体を見て、それから正しく鋭く人間を見る眼を養ってもらいたい。

塩野君はこれから同志社大学経済学部で学ぶと聞いている。しかし、どうか同志社大学で研究を終えないでほしい。同志社大学を卒業したなら、アメリカであればハーバード大学、イギリスであればオックスフォード大学かケンブリッジ大学でさらに研究を続けてほしい。そして、塩野君として学を極めてほしい。

その上で、塩野君にお願いがある。この3年間、私が同志社香里中学校・高等学校で打ち込んできたことを、塩野君には分かってもらえたと私は信じている。そこで塩野君にお願いがある。

(ここで、生島校長は少し間をおいて、私をじっと見詰められた)。

ひとつ私の志を引き継いで、同志社のキリスト教教育を担ってくれないかね！

語り終わられてからも、生島校長は私をじっと見つめておられた。生島先生の顔を見上げ、心の内に「先生の信頼を裏切るわけにはいかない！」と強く思うのであった。